099

外国人留学生のはじまり

一八九六（明治二十九）年九月刊行の『法学新報』六六号は、「朝鮮国より派遣されたる留学生五名、今回東京法学院に入学を申込み、同院に於て直ちにこれを許容し、入学の手続を了して同院の学生となれり」との記事を伝え、その理由を次のように述べている。「東京法学院の学制の完備せる、教授方法の整理せるは天下の知る処、今や其名声海外に輝きて、外邦の留学生が進んで入学を申込むに至りたる」と。東京法学院の名声が海外にまでとどろき渡ったためであると自信たっぷりの評である。

しかしその実は日清戦争に「勝利」した日本の国力の急速な発展の秘訣を学ぶために彼らは派遣されたのであった。その五人のうち四人が三ヵ年の課程を修め九九年に卒業しており、また『学員名簿』をみてもこの年以前に外国人の卒業生がみあたらないことから、本学最初の外国人留学生は彼ら朝鮮人学生であったと考えられる。

ところが、それ以降朝鮮国からの留学生はあまり多くなく、翌一九〇〇年に二人、〇二年に一人、〇五年の卒業生を入れても〇八年までに計八人をこえず、いわゆる一〇年の「韓国併合」以降に徐々にではあるが増加傾向を示している。

これに対して驚くばかりの急増を示したのが清国からの留学生であった。清国は日清戦争での「敗戦」を分析し、近代西洋文化導入の必要を考え、それをいち早く摂取した日本にその模範を求めるようになったといわれる。〇一年九月に初めて清国から三人の留学生が本学に入学した。

これを伝えた『法学新報』一二六号によれば、彼らはそれ以前に来日し、高等師範学校長嘉納治五郎のもとで日本語と普通学（一般教養）を学習した後で、各学校に配置されたという。この三人の後にも曹汝霖（そうじょりん）ら数人が入学しており、〇四年の卒業者は四人となっている。同年から翌年にかけて勃発した日露戦争で、日本が大国ロシアを相手に戦争を遂行したことで、ますます清国内に日本留学の一大ブームがまきおこり、〇六年には一万三千から二万人ともいわれる大量の清国人留学生が日本に滞在していたといわれている。

これに符合するように本学においても多数の清国留学生が入学するようになり、〇八年の卒業者が九人であったのに対し、翌〇九年三五人、一〇年四五人、一一年には三九人を数えている。しかも、当時の卒業生数は学部・専門部合わせても一〇〇人をはるかに下回るほどの本学低迷期であったため、全卒業者に占める清国・朝鮮両国留学生の割合は、〇八年が一五・五パーセント、〇九年が五一・三パーセント、一〇年五〇・五パーセント、そして一一年が最高で全卒業生七一人のうち五四・九パーセント、すなわち三九人が清国人留学生であった。実に驚くべき事実である。

曹　汝霖

『学員名簿』などからひろいあげてみると清国人留学生の卒業者は〇四年から二二（大正十一）年までにおよそ三百人に達している。当時の卒業式は、留学生総代の答辞や留学生の晴れ姿を見るため、清・韓両国の公使などが来賓として招かれるなど、きわめて国際色に富んだ光景であった。

本学は、留学ブームに乗じて「留学部」や「法学速成科」といった留学生専門の学科を設置した早稲田大学や法政大学に比べると留学生数も少なく、また中国近代史上の著名な人物の留学が多いとはいえないが、辛亥革命後に中華民国で活躍した曹汝霖や、孫文の側近で国共合作を推進した廖仲愷（りょうちゅうがい）（恩煦（おんく））なども輩出している。

このように政治の表舞台で華々しい活躍をする人物よりも、それほどには目立たないが地道で着実に進んでいくような人物を送り出していることが本学の特徴であり、いわゆる「華美を排し質実剛健」という「学風」にマッチしているように思われる。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。